慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	牧野信一「夜見の巻」論:採集・名前・幻想
Sub Title	
Author	副田, 賢二(Soeda, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	2001
year	
Jtitle	三田國文 No.33 (2001. 3) ,p.25- 37
JaLC DOI	10.14991/002.20010300-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20010300-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

牧野信一「夜見の巻」 論 採集・名前・幻想

副田

賢 二

1 〈私ーゼーロン〉をめぐる関係性の構造

昭和八年十二月、『文藝春秋』に発表された牧野信一の「夜見

される。 題名をめぐるこのような二重化は、「夜見の巻」といったいる。題名をめぐるこのような二重構造が、このテクストの構造及びそのフィであるかのように見せる効果をもたらすことになるだろう。 そして、このような二重構造が、このテクストの構造及びそのフィであるかのような二重構造が、このテクストの構造及びそのフィであるかのような二重体は、「夜見の巻」といの巻」には、「『吾が昆虫採集記』の一節」という副題が付けら

四章冒頭部のみである。
た後、我慢していた放尿を果たすことが書かれる三章末に続く、が「ゼーロン」を偶然ではあるがうまく乗りこなして称賛され構造を窺わせる記述は少ない。それが明確に示されるのは、「私」だが、実際のテクストには、そのような仕掛けとしての二重

さうならば、あたりは既に秋の香りが立ち込めて、私は低道に外れる故に省略して、夜見の酒倉の二階にペン先を戻「吾が昆虫採集記」の件りとしては、その間の出来事は脇

いラムプの下で蜂の巣の破片を整理してゐた。

(以下傍線は全て論者に拠る)見て取れる。 (以下傍線は全て論者に拠る)見て取れる。。 (以下傍線は全て論者に拠る)を取れる。 (以下傍線は全て論者に拠る)を取れる。 (以下傍線は全て論者に拠る)を取れる。 (以下傍線は全て論者に拠る)を取れる。 (以下傍線は全て論者に拠る)

であるに過ぎないのだ。実際に四章末でも「肩に掛けた弓張りズムのかたちを対比的に析出し、差異化するための「基準点」という人物設定上のこの前提は、テクストの変転するダイナミのである。つまり、私という人物が「昆虫採集」に興味がある、のである。どこが薄い部分なのか、ということはよくわからない部分で、どこが薄い部分なのか、ということはよくわからなただ、このテクストのどこが「『吾が昆虫採集記』性」が色濃ただ、このテクストのどこが「『吾が昆虫採集記』性」が色濃

不変の定点として存在していることがわかる。 ぐる物語と並行して、私のこの「採集者」としての在り方が、 テクストの進行につれて様々に変転する〈私-ゼーロン〉をめ しまれて尚も微動さへ浮べなかつた」と書かれているのであり、 食指が動いたが、折角の姿勢と未曾有の恍惚状態を崩すのが惜 を見て、「私の採集は膜翅から直翅に移つてゐたので少なから 提燈にえんまこほろぎが止まつて頻りと翅をこすつてゐた」 ず 0

部にゼーロンという存在がいることは言うまでもないだろう。 野口武彦氏が言うところの、私の「ゼーロンへの入れこみかた」 ムの質自体に注目してゆくことが重要になるだろう。 にくいのであり、やはりそこでは、このテクストのダイナミズ [いからやはり出発しなければならない。このテクスト そこで、「夜見の巻」における「ゼーロン」とは何か、 よって、このテクストは、 分析できるような方法的性質を持ったものであるとは考え そのフィクション構造にお -の中心 という V) て分

このような記述が問題になるだろう。 かたちを、テクストから抽出する必要がある。まず、一章の 私に慣れてゐなかつた。 ンテにも匹敵すべき私の愛馬であつたが、 荷馬であるが、そして私の空想ではドンキホーテの ゼーロンとは私が五六年も前に抽象的に名づけた酒倉の老 永年の間夢に慈しみを寄せつづけてゐたせゐか、 私はそれに勝手にそんな名前をつ 実際では ū ロシナ 目{の{

が一尾腹にとまつても激しく全身を震はせて飛びあがつた あたりでは一向私に親しみもせず、おまけに臆病馬で、虻

牝馬に出遇ふと己れの廃齢たるも打ち忘れて機関車の

のであり、

そこにはいわば相互的な制御関係

(「御する」 「御さ

)制御してしまうようなかたちが噴出してくる

が私の側を圧倒し

0)

ここでの〈私-ゼーロン〉の関係性の構造は、 ともすると彼等は、その鞍を私にすすめるのが習慣だつた。 憎念に炎ゆるのであつた。だが永い間の私の「ゼーロン やうに猛り立つたりする態に接すると、 寄せる感傷性は、やがて人々の間でさへ認められて稍々 悲しみともつか このような三つ

ていたという心理的関係性 私の側がゼーロンを幻想化して、 ロシナンテになぞらえ

В

私の幻想化にも関わらず、

ゼ 1 口

ンは私に全く慣れてく

の層に分かれていると考えられる。

Α

C ゼーロンが結びついていると周囲の人々から信じ込まれて れないという現実的関係性 私の幻想に基づくゼー ロンへの 「感傷性 ゆえに、私と

要素がこのテクストには氾濫しているのであり、 私の自意識をめぐる物語として単純化するには余りにも雑多な の一元性からの逃走)の跡を見出すことも可能だろう。 みられた、小説表現をめぐる方法的模索(あるいは ための仕掛けでもあろうし、そこに、一九三○年代に様々に試 ることができる。 ような異なるレベルの関係性が、 ロンという存在の感触からも、やはり目をそらすことはできな |夜見の巻] というテクストは、 ŲΔ るという社会的関係性 このBの関係性においては、ゼーロンの身体や生 勿論それは、私という存在をパロディ化する 〈私-ゼーロン〉をめぐるこの 相互に交錯する場として捉え そこでのゼ (-----部分 「私小説 しかし

つまり、このテクストにおけるゼーロンは、私の幻想的内面まれている、テクストの根源的な動力でもあるのだ。二章での一見自意識的な堂々巡りの「狂奔」の内部にもなお孕クターになっていることも確かである。そしてその演技性は、の関係性が、「夜見の巻」における私の演技性を生む重要なファの関係性が、「夜見の巻」における私の演技性を生む重要なファれる」の関係)が存在していると言えるだろう。また、このC

する存在なのである。例えば、このような記述が注目される。 そのような関係性の絶え間ない交錯と軋みの現場の内に「棲息 の内に単一なイマージュとして見出された存在なのではなく、 その憎体な嘶きで飼手を飛びあがらせたり、尻尾の房で面 馬の機嫌を窺ふくらゐであつた。どういふものか、 私の方が臆病で、どちらかと云へば私の方が遠まはしに老 信じてゐるといふ風になつてしまつてゐるので、別段に憎 だつたが、変なハズミから他人前では特に私はゼーロンを それは私の心底に真の愛情が湧かぬためだらうが、 い眼つきもしなかつたし、また蔭ではゼーロンよりも寧ろ いつも私は、力一杯に「びんた」の衝動に駆られるのが常 体を振り払つたりするばかりであつた。 ど私が奴の空機嫌をとつても一向に慣れるけしきもなく、 |な声で醜い嘶きを発した。 ゼーロンは、突然歯をむき出すと、鼻つまりのやうな鈍 その特異な嘶きを耳にすると どれほ いや、 面

いる」ことを指摘し、「ゼーロンが記号表現系を介して語られな己自身のメタファーの美酒」から牧野がそこで「醒めはじめてゼーロンはその場の中で非確定的な動きを示す。野口氏は「自的に交錯し、決して整合化されないままに展開されるのであり、このテクストは、〈私-ゼーロン〉をめぐる様々な関係性が複合

いその分だけ、当人の記号内容性が露出されてくる」として

力的解消を夢想させるくらいに、焦燥感や不全感を常に私に突ら、――どんなに目醒しいことだらう」と、私にその停滞の暴居のやうな平手が、どす黒いゼーロンの頻骨に景気よく響いたなのではなく、その身体に様々な故障を抱え、「あの若者の団在なのではなく、その身体に様々な故障を抱え、「あの若者の団在なのではなく、その身体に様々な故障を抱え、「あの若者の団在なのではなく、その身体に様々な故障を抱え、「あの若者の団をなのではなく、そのような記号性の質の問題のみに、ゼーロンをいる。だが、そのような記号性の質の問題のみに、ゼーロンをいる。だが、そのような記号性の質の問題のみに、ゼーロンをいる。だが、そのような記号性の質の問題のみに、ゼーロンをいる。だが、そのような記号性の質の問題のみに、ゼーロンをいる。だが、そのような記号性の質の問題のみに、ゼーロンをいる。

源」なのである。佐藤泰正氏は「自己のとった文体と方法を、固定した形態に纏まり得ない、ある攪拌的なダイナミズムの「起」でロン」という牧野テクスト固有の記号は、決して一つのう馬が一貫した普遍的特性を示している訳ではない。逆に、ン」という名前において、牧野テクストにおけるゼーロンといはじめている」という感触は感じられるが、と言って「ゼーロはじめている」という感触は感じられるが、と言って「ゼーロはじめている、この「夜見の巻」で牧野信一という表現者が「醒め

き付ける、「廃齢」の身体を抱えた駄馬なのである。

由来する臆病さ、そして「空機嫌」取り、である。二章までの他人に「私はゼーロンを信じてゐる」と思われていることから

を喚起する。「『びんた』の衝動」という暴力的な反応、

ここでのゼーロンの「特異な嘶き」は、

私の側に多元的な反応

そして

ばならない。 内部領域に存在するものではないことを、 述 でているが、このゼーロンが、決して確定された私の幻想の 内側から精一杯に蹴散らし、 相対化し、その「詩論」に不 まず確認しておかね

性の構造が、私によって対象化され、呈示されるのである。 ある異和的な「対象」であると言った方が適当であるだろう。 私が抱える内的なストラグルがそこに衝突し、滞留してゆく、 ここでのゼーロンは、 うなエネルギーの喚起作用を常にもたらしている訳でもない。 章では、そのような〈私-ゼーロン〉をめぐる錯綜した関係 とは言え、「夜見の巻」におけるゼーロンは、 テクストを活性化させると言うよりも、 佐藤氏の言うよ

V

世

2 狂奔と転換 私の演技性

愛するのあまりそのやうに気ままに放擲してゐるのだらうと思 から始まるのである。 ている、 テクストが始まる以前から既成のものとして社会的に認知され な「前提」として(〈私-ゼーロン〉の「感傷」的な関係性は、 章では、〈私-ゼーロン〉をめぐる関係性のかたちはいわば強固 くすぶ」らせつつ、私と「廃齢たる」ゼーロンは動き出 まる。「びんた」の「想ひを晴らし損つた向つ腹」を「胸一杯に そのようなゼーロンが再び動き始めるところから、 すなわち、そのような関係性の構造が流動化してゆく瞬間 そのような場の中心にいるゼーロンが「 となっているのであるから)確定されていた。だが、 そこで村の「若者」は 「私がゼーロ 動き出す」瞬 二章 ずは始

> このような部分である。 そのような部分こそが、「牧野信一」像の内で最も流通している。 二章はそれ以降、ゼーロンの不規則な動きと私の意識の明滅に やうに姿だけはのうのうと胸を張つ」て「発足の合図をかける おいて、パノラマ的に展開されていると言えるだろう。 のだが、ゼーロンは「飽食した時」にのみ気ままに歩き出す。 ひ違へて」おり、私はそれを意識しつつ「多くの傑れた騎手の わゆる「ギリシア牧野」 的表現であるとも言える。 そして

折れて、 た。 ば、私は矢庭に槍を伸して打ち払ひ、ゼーロンの耳をつか ら、ここを先途と戦はれていつに果てるかの始末もなかつ ててゐるので観衆には私の表情がありのままには映らなか の鈍りが現れ、 水車小屋の構造のやうに活躍を続けてゐたが、 両脚の猛獣捕獲器の如きバネ仕掛けと、 やうに殆んど一直線に拡げた両脚を飛びあがりざまに、 んで鼻面の向きを変へて、滅多打ちに尻を打ち、 とする、 私はゼーロンの喉笛に武者振りついて、息の音を止めよう ハッタ! と打ちしぼめて左右から馬の胴を蹴つた。私の 紀末流の泰平民の残虐性に投じて歓呼の声を浴びなが ゼーロンと私と、悪童の牝馬との世にも奇怪な格闘 ―二頭の馬は前脚を挙げて棒立ちになるかと見れば 敵方が後脚をあげてゼーロンの頤を蹴らうとすれ 精根も尽き、 あはや私の腕や脚はバッタのそれのやうに 今にも昏倒しかかつた。 右腕の鞭の力とは 次第に動 面紗をへだ 鷲の翼の は

もう眼蓋さへも動かすことが出来ぬやうなフラフラ状態 が強さうだぞ!」などといふ賞賛を浴びせるのだが、 うなものにふはふはと体を宙に浮せられるかのやうだつ 妙にあたりがしいんとして来ると、有り難い眠りのや 私

事態が起きているのである。 され、それが外部からの視線の内に演技的に反復されるような に浮遊し続けてゆく。ここには、意識の運動自体が自己目的化 ながら、〈私-ゼーロン〉をめぐる運動の「有り難い眠り」の内 らの身体的主題である「用を足す」ことの内に小さく縮こまり 被った私は、外部の視線の速度に同調することさえできず、 たものであることは、やはり意識されねばならない。「面紗」を ていたところの「臆病馬」としての属性のかたちを忠実になぞっ 実際、この二章でのゼーロンの「狂奔」が、一章で私が定義し の視線が常に意識された上での、演技的「狂奔」なのである。 うに、〈私-ゼーロン〉の在り方を外部から対象化する「観衆 うにも見える。だが、あくまでこれは、傍線部からも窺えるよ このような描写は、一見すると狂奔するエネルギーの描写のよ 白

述から映像的な叙述へと転換した二章は、 に全て回収されるものではない。説明的な傾向の強い一章の記 落ついてやがら、 あいつ奴、わらつてゐるやうだぞ!」 その直後このように そのような反復の内

ただ、このテクストのダイナミズムは、

そんな声が、遠くから聞えたが、何といふこともなしに 「自分こそ面白がつてゐるんだらう!」

١

は

弄ばれる小舟に似た馬の首根に観念の眼を閉ぢて、 網の棒を、意味もなく空へ向けて投げ棄てたまま、 と呟いた。そして私は、たしかにそれまで握つてゐた捕 もう駄目だ!」 激浪に 安らか

に眠つた。

ことが、後のスズメ蜂事件に繋がってゆくのであり、それはこ そこに浮上する。勿論そのような像化こそが私をパロディ化 ここで、そのような私の姿を解釈する声が「遠く」から聞こえ、 で握つてゐた捕虫網の棒を、意味もなく空へ向けて投げ棄てた」 ともなし」に「ああ、もう駄目だ!」と呟き、「たしかにそれま る機能を果たしているのだが、同時にここで私が「何とい 狂奔するゼーロンを冷静に乗りこなす私、という意味的な像

のテクストの転換と統合の機構を窺わせる重要な要素であろ ても仕方がないような高度な制御ぶりを見せていることは、こ ない」という私の意識レベルの前提が、二章の進行とともに をめぐる関係性の物語は、二章の内部で、主に私の意識の枠組 つの間にか「解除」され、結果的に私が「秘術」(三)と呼ばれ みの変質において融解してゆく。 私が一章において自ら喋り、前提としていた〈私-ゼーロ 私が「ゼーロンを乗りこなせ

う。Cの関係性において成立している「私とゼーロンが結びつ

うこの二章の事態までを説明するものではない。ここでテクス いている」という前提は、私がゼーロンを偶然乗りこなすとい

自らが冒頭で措定した形態の枠組みを超え、新たな地点

の二章における決定的転換点であると言えるだろう。

は、ゼーロンに騎乗する私をめぐるこのような記述からも窺うは、ゼーロンに騎乗する私をめぐるこのような記述からも窺うへと展開してゆくようなダイナミズムを帯び始めるのだ。それ

私は、思はず前後のことも忘れて、

と呟いた。此奴が、このままくたばつてしまへば、今こ「これは、うまいぞ!」

に私は蘇生の感を沁々と味はつた。持ち怺へてゐた用が足せるぞ!」と思つた。その瞬間、真持のいのうと鞍から降りて、何ものよりも切なくここまで

も考えられるだろう。この、ゼーロンが死んで私が再生する、ここにはパロディ化された「死と再生」のモティーフがあるとであり、そこではゆっくりと「用を足す」ことさえできるのだ。かったであろう。このゼーロンのへたばりは私にとっては僥倖かったであるう。このゼーロンのへたばりは私にとっては僥倖のような事態は、恐らく一章の時点では予想さえされていな

ムをめぐる転換が表象されているのである。というかたちにおいて、〈私-ゼーロン〉の関係性のダイナミズ

クストのエクリチュールの領域から飛び去っており、Bの関係スズメ蜂事件をめぐる記述においては、Aの関係性はとうにテス・エクス・マキナ的解決を迎える。そこで〈私‐ゼーロン〉私の意識の内部で自転していた二章の物語は、結果的にデウ私の意識の内部で自転していた二章の物語は、結果的にデウ私の意識の内部で自転していた二章の物語は、結果的にデウス・エクス・マキナ的解決を迎える。そこで〈私‐ゼーロン〉をめぐる「既存」の関係性の構造は散失してしまうのだ。このような二章での「活劇性」の浮上は、スズメ蜂事件をさらにテクストに呼び込むことになる。「さっき夢中で投事件をさらにテクストに呼び込むことになる。「さっき夢中で投事件をさらにテクストに呼び込むことになる。」

から)ものであろう。刺されたというその否応のない激痛故に暴れているだけなのだ。関係性の内で「狂奔」しているのではなく、ただスズメ蜂に態としてはあり得ない(ここでのゼーロンは、対「私」をめぐロンの「狂奔」の最中においては、もはや「関係性」という形

性における「慣れてくれない」という現実性自体も、このゼー

してなされるという「落ち」において、〈私-ゼーロン〉をめぐしてなされるという「落ち」において、〈私-ゼーロン〉をめぐされるべき「訓話」が、耐えに耐えていた「用を足す」こととされるべき「訓話」が、耐えに耐えていた「用を足す」という意味的な帰結の内に、テクストは沈静化してゆく。この三章においで一旦無化され、私の能力をめぐる村民の「誤解」という意味のな帰結の内に、テクストは沈静化してゆく。この三章においては、私の意とまってゆくのであり、その最終部では、一同に「謹聴」という意味であるべき「訓話」が、耐えに耐えていた「私-ゼーロン〉をめぐ

もはや私の「所有物」ではなくなってしまっているのだ。そこ この段階では、Cの関係性の構造に基づいた私の演技性自体が、 形で改めて言語化されるべきものとして、私に強要されてゆく。 衆人の目の前で胴上げとして儀式化された上で、「訓話」という 希な馬の乗り手であるということ)の側に暴力的に転化され 係性は、文句なく賞讃されるべきものとして公共的意味 る物語は一旦完結するのだ。そこで〈私-ゼーロン〉のCの関 (類い

ゼーロンから引き剝がされてしまう。

もその内容レベルにおいても明らかな断層があると言えるだろ つまり、 係性の散失を経て、四章の私は改めてゼーロンに対峙してゆく。 このような自己の演技性の無意味化と、 よって、 三章と四章の間には、テクストの構造レベルにおいて その断層の間に横たわる問題を、 〈私ーゼーロン〉の関 次に検討せねば

3 孤立するゼー ロン・ 孤立する

間へと変わる。そこは「蠍座の一端から仄かに流れ出てゐる銀 重苦しい身体の磁場から解放され、 という場は、 とのできる場でもあった。つまり、この「夜見の酒倉の二階」 更けのアンドロメダを呼んでゐ」る、 河が北方の空高く龍巻山の上に翼を拡げる白鳥座を貫いて、夜 村までの野外の空間から、「夜見の酒倉の二階」という室内の空 四章でテクストの「ペン先が戻」される場は、夜見から竜巻 私のまなざしがゼーロンの非確定的な動きやその 自在なパースペクティブを 壮大な宇宙を見上げるこ

> 帯びることのできる、いわば「幻想の温床」であったのかも れない。

しかし、

が続く。 いる私の在り方を示すものであろう。さらに、このような記述 既に断片化した「ゼーロン」という記号を再構築しようとして 低いラムプの下で蜂の巣の破片を整理してゐた」という記述も、 性の領域に引き戻してゆくのだ。この四章の冒頭にある、「私は サス-ビッコ馬-土龍馬-ペガサス〉と連なってゆくその記 から離脱することがないのであり、再び私はゼーロンを そこで私の想像力は決して「ゼーロン」とい . う場

さうと努めたのである。 ロンを軽蔑して、土龍と嘲つてゐる影法師連へ想ひを通は 大いそぎで星空から眼を落すと、 に、そんなきらびやかな連想を通はせるだに業腹なので、 花やかな畏怖に駆られて来るのであつた。あんなビッコ馬 つて、いつかは天空のペガサスを連想せずには居られない はこの世のものとも思へぬ程の、 ではあるが、その理由はともあれ、 私は星を眺めてゐると、あんなに憎らしいゼーロ 日頃から口を極めてゼー 観れば観るほど異彩を放 あの素晴しい狂奔振

さんらんたる金色の後光が輝き始めるのであつた。 を駈け回り、 奇怪な幻は見るも鮮やかに虚空を蹴り、 「もぐらだ! まさしく彼奴は土龍の性だ。 と私は呟くのであるが、 やがては恵みに富んだペガサスの頭 逆らへば逆らふほど翼ある馬 きらびやかな星空

上には、

この「ペガサス」幻想の強度は、「ただの幻想」という惰性的な

ゼーロンは、私の薄弱な幻想の領域にいわば揺曳している存在て浮上していることを示していると思われる。ここにおける「何々すれば何々するほど」という表現は、この「ペガサス」る「何々すれば何々するほど」という表現は、この「ペガサス」やかな愛玩を今日まで生んできたわけであるが)。ここで頻出すやかな愛玩を今日まで生んできたわけであるが)。ここで頻出すいが、対野テクストへの密あろう(逆に、そのような薄弱さこそが、牧野テクストへの密あろう(逆に、私の薄弱な幻想の領域にいわば揺曳している存在

てはCの関係性は既に散失しており、そこではただ、ゼーロン存在ではなくなっていることだけは確かであろう。四章においくわからない。ただ、この私がゼーロンとともにまなざされる「評価」を受けているのか、その辺の事情はテクストからはよ一方、三章での賞讃を経た私が、その後周囲からどのような

い。勿論それは「本来」のゼーロンに戻ったということかも知ロン自身のどのような感情に起因しているのかは明確ではな孤立し「土龍馬」と呼ばれるこのゼーロンの「籠り」が、ゼー

ということ自体は、決してテクストに内在する要素によって説

に、そこには何らかの変質があると考えられる。ここでゼーロンが「なぜか人間の姿を極端に嫌」うことは、〈私-ゼーロンンが「なぜか人間の姿を極端に嫌」うことは、〈私-ゼーロンンが「なぜか人間の姿を極端に嫌」うことは、〈私-ゼーロンンが「なぜか人間の姿を極端に嫌」うことは、〈私-ゼーロンンの「採集者」的相貌とどことなく似通っているようにも思える。ここでゼーロントで、ここでのゼーロンので、ここでのゼーロンのでは、「なぜか人間の姿を極端に嫌」うと書かれているようれないが、「なぜか人間の姿を極端に嫌」うと書かれているようれないが、「なぜか人間の姿を極端に嫌」うと書かれているようれないが、「なぜか人間の姿を極端に嫌」うと書かれているようれないが、「なぜか人間の姿を極端に嫌」

たとへこの現世の上では、不貞くされの土龍馬であるとの関係性を構成していた「論理」が露出してゆく。その意識の内には、三章までは存在していた〈私-ゼーロン〉

て、提燈に火を入れた。はうしろ目たき思ひであらう――私は、終ひにさう気づい上は、自分までが土龍馬と蔑んで見回りもしないといふの上は、へ、ひとたびゼーロンとしての因果なゆかりを持つたはいへ、ひとたびゼーロンとしての因果なゆかりを持つた

という、いわば既に確定した因果性、事実性として捉えられるは示唆されているが、それが「ゼーロンとしての因果なゆかり」とを示すものというよりも、むしろその「転倒」性こそが、〈私とを示すものというよりも、むしろその「転倒」性こそが、〈私とを示すものというよりも、むしろその「転倒」性こそが、〈私とを示すものというよりも、がある。そしてこの「転倒」は、ここにはある決定的な「転倒」がある。そしてこの「転倒」は、

においてここで対象化されるのだ。その意味で、この四章に浮 上しているのは、 れた上で、ゼーロンは「あらかじめ『ゼーロン』であること」 保証されるものではない。「因果」をめぐる順序性が無化さ もはや関係性の問題とは言えないものであろ

う。私とゼーロンはそれぞれ自らの孤立性を抱えて「夜見」と いう場の周辺に放置され、そこで再び出逢うことになる。 そし

掛けるその出逢いの現場において顕在化することになるのだ。 |畑が青白く光つて、淵のやうに静かだつた。(中略)横木 酒倉の軒下を抜けて納屋裏へまはると、星月夜に映えた

私の転倒性自体が孕む問題は、私がゼーロンに実際に呼び

と寝そべつてゐた。人間を毛嫌いしてゐるといふからには の間から覗いてみると、なるほど奴は頭部を奥にして太々 て脚蹴にでもされるだらう― 私であるといふことを悟られたら激しく冠りを曲げ -私は誰よりも奴に対して脛

だ。

だが、

私はそこで同時に「自分のわざとらしい音声」

(私の

獣に餌でも与へるかのやうな臆病な物腰で、さつと奴の口 そして息を殺して様子を窺つた。土龍馬は寝そべつたまま のあたりにパンの棒を投げ出すと同時に外へ飛び退いた。 に傷持つ身と覚えてゐるので怕る怕る近づくと、まるで猛

つくり声で ゼーロン!」

餌食を頰張つてゐたが、

私はいか

にも

物優しく慈愛のこもつてゐるかのやうな 別段私に危害を加へさうもないの

そらく最初の決心だつた。 と呼んだ。 音声に冷汗を覚えずには居られなかつた。 奴と面と向つて 私は吾ながら自分の この名前を口にしたのは、 わざとらし

お

0

演技性とは全く異なるものなのである。

そのような暗さが影を落としている。 感触とともに、「黄泉」にも繋がる冥界的な死のイメージがつき といういかにも多義的な深読みを許す地名には、その密やかな の場は、決して愛情や慈しみに溢れた暖かい場ではない。「夜見」 な語り手を除いて)。ただ、この私秘的で密やかな両者の関わり 勿論ここでは、 まとうのであり、 私とゼーロンの姿を誰も見てはい 私のゼーロンのこの再会の場面にも、 ない やは (超越的

ロン」という名前、そしてそれを呼ぶ私の「声」と交錯するの 記号性の間を浮遊するゼーロンの身体は、ここで初めて「ゼー て「ゼーロン」という名前を口にする「最初の決心」をする。 尽くした果てに、その記号の分厚い堆積層を飛び越えて、 < ペガサスービッコ馬ー土龍馬ーペガサスー愛馬〉と、 この四章で私は、ゼーロンという対象をめぐる記号を採集し 様々な

内に浮上するものなのであり、それはCの関係性に基づく二 れた私の演技性は、 する、その回復行為の決定的な事後性を自ら意識したためであ 周囲からは「土龍」と一義的に名付けられてしまったゼーロン えずには居られな」い。それは、様々な記号の内に断片化し、 はここでは「音声」として知覚されている)に対し「冷汗を覚 るのだろう。そして、この「自分のわざとらしい音声」に孕ま 〈私ーゼーロン〉の一体的な関係性の場に再び奪還しようと あくまで私とゼーロンの二者間の関係性の

33 ---

4 「黒い塊り」としてのゼーロン

――「幻想」の可能性をめぐって

要素である。 そして、そこで問題になるのは、その直後の記述に孕まれた

を窺つた。でつとして豆畑のふちまで後退りして、じつと土龍の顔色でつとして豆畑のふちまで後退りして、じつと土龍の顔色て、人の声の方に首の方向を向けて来るのであつた。私はすると枯草の中から、黒い塊りが、やをらと起きあがつ

のことに」、私に「猫のやうに慣れて」来るのだ。 だが、この「黒い塊り」はその直後、「全く私にとつては意外ここでアイロニカルなかたちで裏返されているのである。いいう事態が起きているのであり、「死と再生」のモティーフは、

──ところが、全く私にとつては意外のことには奴の両眼──ところが、全く私にとつては意外のことには奴の両側へ寄つて呉れと物言ふが如くにこつこつともつと、私に側へ寄つて呉れと物言ふが如くにこつこつともつと、私に側へ寄つて呉れと物言ふが如くにこつこつとを語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を記して、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らふ如く微かな吐息をついた。──私は、もう大丈夫を語らない。

「ゼーロン!」

ロンの存在の実質をめぐる、決定的な「事件」であったのであいたので値に、 まさにこのテクストのダイナミズムの中心ロンの「慣れ」は、まさにこのテクストのダイナミズムの中心ルス的な物語機能を果たすものであった。しかし、ここでのゼールス的な物語機能を果たすものであった。しかし、ここでのゼールス的な物語機能を果たすものであった。しかし、ここでのゼールス的な物語機能を果たすものであった。しいう二章後半に見ら私の意識を越えた所から転換が訪れる、という二章後半に見ら私の意識を越えた所から転換が訪れる、という二章後半に見ら私の意識を越えた所から転換が訪れる、という二章後半に見られた。

(「あのゼーロン」への遡及不能性) が再び発見されてしまうと

うことは、まさしくこのゼーロンという存在の質自体に関わる 龍」に戻り、 こともできなかったのだ。この「黒い塊り」が即座に元の「土 さらには「猫のやう」な存在になってしまうとい

的に私と一体化してくれることを既に予期、確信した上で発さ ゆえに、そこに「幻想」の強靭な〈論理〉が生まれる余地はな 月的な場においては、 問題であろう。一章で私の内部に一旦浮上した「真の愛情」と れたものであった。 しさう」なその素振りにおいて見出されている。このような密 いう観念と同質の感触が、ここでその「物優し」さや「真実親 一回目のそれとは全く異なったもの、つまり、 い。ここで発された二度目の「ゼーロン!」という呼び掛けは、 その甘美な期待とともに、このテクストは 当然対象の他者性は排除されてしまうが ゼーロンが自発

う一つの可能性」を見出すことも可能かも知れない。ただ、そ ており、そこにこのテクストの能動的な意義がある、 のような自己の構造の対象化が、「未知の世界への投企」として い方もできるだろう。もしかするとそこに、「小説のことばのも において、 らかに「後退」であると言えるだろう。確かにこの「夜見の巻 極言すれば、ここで「仮構」されたゼーロンの自発性は、 新たな「幻想の〈論理〉」を生み出し得るかどうか、という 私のゼーロン幻想をめぐる転倒性は自ら暴き出され という言 明

けた。

層全身に力を込めて、

壮麗な大空をほのぼのと見守りつづ

設定された、方法としての「不自由さ」であったとも言えるだ 見方を変えれば、ゼーロンという対象に接近するためにあえて

るが、

ン〉のその姿を「銅像」化する)ことによって維持しようとす

それが決して銅像のような永続的形態として存在し得な

ことは、また別の問題である。このテクストに前提化されてい

〈私-ゼーロン〉をめぐるA・B・Cの関係性の構造とは、

閉じられてゆく。

され続けるのである。 失ったままに、 この私の無力さは露呈してしまう。そこで私の幻想は行き場を 記号性の殻を剝ぎ取られたゼーロンの身体と直面した瞬間に、 ろう。そのようなテクストの前提としての構造を一旦 いわばスナップショットとして永遠に「保留. 解体し、

生温く動いて次第に私は切ない擽感を覚えはじめたが、一 ンの吐息と首の重量との触感が私の肩先から頰へかけて、 を崩すのが惜しまれて尚も微動さへ浮べなかつた。ゼー なからず食指が動いたが、折角の姿勢と未曾有の恍惚状態 すつてゐた。私の採集は膜翅から直翅に移つてゐたので少 けた弓張り提燈にえんまこほろぎが止まつて頻りと翅をこ ぬ陶酔を覚えながら武張つた姿勢を崩さなかつた。 空の彼方を望んだ瞳と、ゼーロンの首を抱へた腕に底知れ 勲を立てた名馬と騎手の銅像だ――と私は唸り、 肩に掛 じつと

感を、 てはいるが)。ここで偶発的に成立した〈私-ゼーロン〉の一体 ろでテクストが閉じられる(勿論そこにずれと歪みは刻印され では、「勲を立てた名馬と騎手の銅像だ」と最後に私が思うとこ いぞ」と私が思うところでテクストが終わるのだが、「夜見の巻 ノ氏像」を「鬼涙沼の底へ投げ込んでしまうより他に手段はな 「ゼーロン」(『改造』昭和六・十)では、 私はまたも外部の視線を擬似的に導入する(〈私-ゼーロ 背負ってい た

有の恍惚状態」が破綻し、あの〈私-ゼーロン〉をめぐる果て ない擽感」の浮上は、この「勲を立てた名馬と騎手の銅像」と しなき堂々巡りの自動運動が再び始まってゆく契機さえ孕まれ いう形態の暫定性を既に仄めかしている。そこにはこの「未曾 いことは明らかであろう。ここでのゼーロンの身体の感触と「切

象が、

深度、

内に明滅し、

ているようにも思えるのだ。

角の姿勢と未曾有の恍惚状態」という言い方自体にアイロニー 化の場なのか、それとも、 となく漂わせつつテクストは閉じられる。それはあくまでゼ な大空」に私のまなざしが向けられたまま、 を見出すことはできるだろうが、いささか作り物めいた「壮麗 のか、ここで簡単に断定してしまうことはできない。 しかし、このテクストが最終的に行き着く場所がこの「銅像 関係性の錯綜するあの自意識の場な 明るさをそこは 勿論、 か

動性をもたらすようなダイナミズムを見出すことはもはや難 内に、私の幻想を再びその内部から賦活し、そこに逸脱的な能 再び記号性の領域の内に引き戻されてしまったこのゼーロンの いのかもしれない。

問題なのは、 くような事態)に怯えながら立ち合っていったその私の在り方 自己の幻想性がその対象の内部から相対化され、 がら、「ゼーロン」という対象をめぐる変則的な事態(いわば) ただ、そこで自らの自閉的な幻想のシステムを見極め続けな 単に非徹底なものとして糾弾することはできないだろう。 その私の怯えた「眼」が、その「後退戦」の内に 流動化してゆ

> 内に喚起しているのである。 おける幻想の構造をめぐる新たな読み替えを、その私の怯えの あると思われる。その意味でこのテクストは、 のようなコンテクストにおいて捉え直されねばならないもので 坂口安吾が牧野信一という表現者の内に見出していた「鬼の目」 問題領域の内に、確かに足を踏み入れていたと言えるだろう。 どのような問題領域を捉え得てい 「眼」を抱えた私は、「幻想」という表現形態をめぐる根源的な (坂口安吾「オモチャ箱」『光』昭和二十二・七)の内実も、そ 不意に「黒い塊り」として見出された瞬間、 強度なのである。「夜見の巻」において、 恣意的に意味化され続けていたゼーロンという対 たの か、 とい 様々な記号性の 牧野テクストに . う、 その怯えた その視線

注

ロンという対象をめぐる態度決定の「保留」であり、そこへの

|問い||の停止でもあった。よって、「勲を立てた名馬||として

(1) 野口武彦「足柄山のロシナンテー 記号としての文体』一九八七・九 ぺりかん社 牧野信一『ゼー ロン』」(『文化

2 注1に同じ

3 (『国文学』一九七四・六) 佐藤泰正「牧野信一の文体の問題 ゼーロンものをめぐってー」

4 守安敏久「〈悲しき道化〉牧野信一」(『日本近代文学』一九九一・

5 味でこの「夜見の酒倉の二階」という場は、牧野テクストにおいて 感を志向する拡張的営為としても捉えていたことが窺える。その意 何らかの象徴性を帯びた場であるのかもしれない。 でいたという記述があり、牧野が自らの文学を、いわば宇宙的同 野が「小説といふものは、小説は、宇宙へ出す手紙だぞオ」と叫ん 宇野浩二の「夢の通ひ路」(『中央公論』昭和十二・一)には、

佐藤秀明「小説のことばが立ち上がるとき ・足柄山の『ゼー

6

五 講談社現代新書)(7) 坂崎乙郎「幻想芸術の世界」1 幻視する魂の系譜(一九六九・ン】-」(『日本近代文学』一九九五・五)

○牧野テクストの引用は、全て『牧野信一全集』第一巻(一九六二・三

人文書院)に拠った。

(そえだ けんじ)